



官能人肉食小説
魔界「OL編」

大黒達也

『魔界（OL編）』

作者 大黒 達也

一・あらすじ

若く美しい三人のOL達が、同僚の男に連れて行かれた村は、魔界への入り口であった。巧妙な手口によつて、三人は欺かれ、暫しのバカンスを楽しむ。裏では、魔界の住人達が、彼女達を神々への生贄とするために、祭りの準備を入念に進めていた。

二・登場人物

加納 賢一（カノウ ケンイチ）

美女達を神々への生贄として、魔界へと誘う水先

案内人。年齢二十六歳。端正な顔立ちに強靱な肉体を有する美丈夫。

葛西 京子（カサイ キョウコ）

年齢二十三歳。切れ長の二重瞼が美しく、抜群のプロポーションを持つ美女。魔界の住人達が、信奉する神々への生贄として魔界の村へと連れて行かれる。

森田 香織（モリタ カオリ）

年齢二十六歳。ハーフを思わせるような彫りの深い顔立ちをした美女。京子とともに生贄とされる。老人ホームや学校で陵辱の限りを受ける。

白鳥 由香里（シラトリ ユカリ）

年齢24歳。売れっ子女優やモデルにもひけを

とらぬような美人。村長宅に拉致監禁され、高校生
の長男や女子大生の長女により、したい放題に陵辱
される。

三・目次

第一章 策略

第二章 肉質検査

第三章 拉致

第四章 前夜祭

第五章 陵辱の嵐

第六章 生贄

第一章 策略

「ここで、二班に分かれます。観光コースとゴルフコースの方達はこのバスに残って下さい。温泉コースの方は名前を呼びますので、社用車に移っていただきます。それでは、森田香織さん、白鳥由香里さん、葛西京子さんの三人は社用車にどうぞお移り下さい」

社内旅行の幹事である加納亮太が、説明を行った。

「きれいどころが、皆、温泉コースか？」

頭部が剥げ掛かった部長の桜田が、不満そうな声を上げた。

「幹事。俺、温泉コースに移ってもいいかな？」

係長の森田が、社用車に乗り込んだ女子社員を窓

から食い入るように見詰めていた。

「残念ですが、それはできません。今回のコースは完全予約制で、変更はききません。多額のキャンセル料をご負担いただけるのでしたらけっこうですが……」

加納が、それだけ言ってバスを降りようとした。

「お前も温泉コースなのか？」

桜田が吐き捨てるように言った。

「これから先は、険しい山道になります。副幹事の

中原は免許を取ったばかりなので荷が重過ぎます。

それに此処は私の地元なので」

それだけ言い残してバスを降りた。降りる寸前に

加納はバスの運転手に目配せをした。運転手は無言

で大きく領いた。ここまで社用車をひとりで運転してきた中原が、加納に代わってバスに乗り込んだ。加納にとって部長のご機嫌など、もうどうでも良かった。計画は既にスタートしており後戻りはできなかった。

「御免、待たせたね」

加納は、社用車に乗り込み、運転席のシートを大きく後ろにずらした。身長が百八センチ以上ある加納は、バンタイプバンタイプの社用車を狭く感じていた。

「大丈夫ですよ」

助手席には三人の中では最も若い葛西京子が乗っていた。今年で二十三歳になったばかりだ。加納は、ミニスカートからはみ出した京子の瑞々しい太

腿をちらりと盗み見た。加納は京子に対し、密かに恋心を抱いていた。切れ長の美しい二重瞼にほっそりとした鼻筋で、口元がセクシーであった。少し茶系に染めたセミロングの髪を自然な感じで肩まで垂らしていた。三人の中では最も控えめな性格だ。

バックミラーを覗くと、三人の中では最年長で、今年二十六歳になる香織の美貌が映し出された。ハーフを思わせる彫りの深い顔立ちをしていた。加納は冷たい感じのする香織の美貌があまり好きになれなかった。

もうひとりの由香里も社内きつての美人という評判どおり、整った顔立ちに豊満なボディを持っていた。

「香織さん。そこにあるクーラーボックスにジュースが入っているよ」

「本当？喉が渴いていたんだ。加納さんも飲む？」

「俺はいいよ。ビールが飲みたい気分なんだ」

「運転中じゃしょうがないわね」

香織は、由香里と京子にジュースを手渡した。加納達四人が乗ったバンが、バスが進んで行った道とは、別の道を進み始めた。加納は幅員が四メートルほどの道を軽快に飛ばしていた。両側には奥深い原生林の森が広がっていた。

すぐに女達の会話が途絶えた。加納はにんまりとした笑みを浮かべて、路肩に車を止めた。彼女達が飲んだジュースには睡眠薬を仕込んでいた。

助手席の京子が可愛い寝息を立てていた。思わず唇に吸い付きそうになったが、睡眠薬が唾液に含まれているとやっかいなことになるので我慢した。

衣服の上から、形のいい乳房を揉んだ。あまりの柔らかさに溜息を漏らしていた。スカートを巻くりあげ、パンティの上に顔を押し付け匂いを嗅いだ。朝、シャワーでも浴びてきたのだろうか、ボディソープのいい匂いがした。興奮のあまり脳が張り裂けそうになっていた。パンティストッキングの上から、白い太腿を撫で回した。パンティの隙間に手を入れて、股間に指先を侵入させた。

柔らかい恥毛を掻き分け、膣口を探り当てた。指を入れ中をかき回したいという衝動に駆られたが、

何とか押さえ込んだ。表面に指先を這わせるだけに止めた。

腰の方から手を差し込んで、パンティの中に手を入れ、尻の膨らみを撫で回した。柔らかく滑らかな肌触りであった。尻の割れ目に指先を入れ、アヌスに少し侵入させてみた。抜いた指先に異臭はしなかった。たぶん、ウオシユレットを使っているんだろう。

加納は京子の着衣の乱れを直した。いずれ好きなだけ抱けるのだと考えていた。他の二人には手を出さなかった。狙いは京子だけであり、二人は村人に任せることに決めていた。加納は、ダツシユボードから携帯無線機を取り出した。

「メインディッシュは確保した。そっちの具合はどうだ？」

「今、底なし沼にバスを落としたところさ。ぶくぶく泡を出して沈んでいるところだ。飲み物に仕込んでおいた睡眠薬のおかげで皆樂に死ぬる筈だ」

「了解。確実に沈んでから、村に戻るように」

「了解したぜ」

加納は携帯無線機をダッシュボードに戻してから、車をスタートさせた。樹海の中に作られた道を軽快に飛ばしていく。

二時間後、加納達を乗せたバンが、周囲を深い森に囲まれた集落に辿り着いた。

そこは村といったイメージは無かった。数百戸は

ある住宅すべてが建坪百坪以上、土地も千坪以上あり、近代的な造りをした豪邸ばかりだった。道幅も広く、よく手入れされた街路樹が植えられていた。その時、女達が目を覚ました。

「私達寝ちやったみたいね。加納さん。ひとりで退屈したでしょう」

京子が声をかけてきた。

「君達、仕事のし過ぎで疲れているんだね。ここでゆっくり休むといいよ」

加納は優しい声で答えた。加納達を乗せたバンは、集落の中心に位置するホテルの駐車場に滑り込んだ。加納が三人を連れて一階ロビーに行き、チェックインの手続きを行った。

「へえ。けっこうりっぱね」

香織が、最上階の十階まで造られた吹き抜けを見上げた。

「こんな田舎にしては、中々のものだろう？」

「田舎って感じはしないわ。軽井沢に来たみたい」

「そう言ってくれれば、すっごく嬉しいよ」

香織は回転式ドアの向こう側に見える白樺並木を眺めていた。

「加納さんのお父様が経営しているんでしょう？」

京子が話題に参加してきた。

「加納ちゃんと結婚したら、高級旅館の若女将になれるんだ」

由香里が潤んだ目で加納を見詰めてきた。

「こんなところで立ち話を何何で、部屋に案内するよ」

加納は、女達を部屋に案内した。和室と洋間がセツトになった部屋だ。ベランダには露天風呂が造られ、いつでも湯に浸かることができた。

「宴会までの時間は、自由時間だ。一階の大浴場やプールが利用できるよ。屋外を散策するのもいいと思う」

「宴会やるの？」

「スケベ親父達のセクハラにはうんざりよ。あら、加納ちゃんは関係ないわよ」

女達は一樣に不満げな顔をした。若い女達にとつて、酔い潰れた中年男達の世話をすることほど嫌な

ことは無かった。

「あら、ここ携帯使えないんだ」

香織が京子に聞いた。

「本当ね。私のも駄目みたい」

「ここは圏外なんだ。生憎、この村の交換機も故障中でね。部屋の電話も使えないんだよ。急用があるの？」

「用事なんて無いわよ。友達に連絡しようと思っただけ」

加納は女達がひとり住まいであることを思い出していた。

女達は三人で一階にある大浴場に向かった。三人とも浴衣に着替えていた。

「最高ね。誰もいないじゃない！」

「私達だけみたいね」

湯煙がのぼる大浴場には、京子達の三人しかいなかった。女達は何種類もある浴槽を梯子して楽しんだ。

加納はホテルの管理室で、彼女達が入浴している様子を隠しカメラで見ていた。その映像は、村の各家庭にも送られている筈であった。

「加納さん。今回は極上ですね」

ホテルの警備員が股間を押さえながら加納に話し掛けた。

「ああ。これまでに最高の獲物さ」

加納は満足げに頷き、モニターに映し出される女

達の裸身に見入っていた。特に京子の裸身を食い入るように見ていた。手足が長く、すらりとしているが、乳房や尻は豊かに盛り上がっていた。

第二章 肉質検査

女達が湯からあがり、部屋で寛いでいるところに加納がやって来た。

「悪い知らせがある」

「何ですか？」

京子が、加納に座布団を差し出した。

「残りの連中が来れなくなった」

加納は座布団に座り、深刻な表情を見せた。

「どうしてですか？」

京子が加納にお茶を入れながら尋ねた。

「バスから無線で連絡があったんだ。こちらに来る途中にある橋が壊れてね。直すのに一週間はかかるみたいだ」

「一週間！それまで帰れないの？」

それまで黙って聞いていた香織が叫ぶように言った。
「た。」

「へりを手配することはできるが、有料になる。かなり高いということだ」

「それって会社が負担してくれないの？」

由香里が加納の顔を覗き込むようにして言った。
「きた。」

「まず、無理だね。部長は君達の休暇を認めていたよ」

女達は、一様に不安そうな表情を浮かべていた。

「大丈夫さ。何も心配することは無い。一週間のバカンスだと思えばいいさ」

「着替え一週間分も用意していないわ」

「一階ロビーに衣料売り場があるよ」

「そんなに現金持ってきていないわ。ここに銀行なんかないわよね」

「一階ロビーにキャッシュディスプレイがある

から、それを使えばいい。そうだ、そろそろ夕飯の時間だね」

加納が言い終わらぬうちに、仲居が夕飯の膳を運んで来た。テーブルの上にはウニやアワビ等の刺身の盛り合わせや、フグ鍋が並べられた。毛蟹や花咲カニが、数匹丸ごと皿に盛られていた。その他にはメロンやブドウ等のフルーツの盛り合わせが所狭しと並んでいた。

「加納ちゃん。豪勢じゃない！」

由香里が目を輝かせた。

「全社員分の宿泊費を君達三人で使うんだ。あたり

まえさ」

「ちょっと、フルーツが多すぎない。これじゃ食べきれないわよ」

香織がいうように、メインディッシュの魚介類や肉類よりも、量は遥かに多かった。不自然なくらいだ。

「この辺りの特産品なんだ。味は保証するよ。それにフルーツは肌の艶を良くするんだ」

「加納さんは食べないんですか？」

京子が言うように、テーブルには三人分しか用意

されていなかった。

「ちよつと、これから用事があるんでね」

「地元だもんね。彼女にでも会いに行くの？」

香織が京子の顔をちらりと見ながら言った。

「ここに彼女なんかいやしないさ。青年会の集まりがあるんだよ。明日から祭りが始まるんだ」

「祭り？」

「出店や花火もやるよ。君達もきつと楽しめる筈だ」

加納が部屋を去ってから、女達だけによる宴会が始まった。京子以外は酒好きで次々にビールが入ったコップを空けていった。最年少の京子も酒を付き合わされた。料理の味も最高であり、高級料亭の味

にもひけをとらなかつた。宴会は深夜にまで及んだ。そろそろお開きというところで、加納が戻つて来た。

「けっこう飲んだんだね」

加納が言うように女達は泥酔の一步手前まで飲んでいた。

「悪い？」

香織は相当酔っているらしく加納に管を巻いてきた。京子はテーブルに顔を伏せて可愛い寝息を立てていた。

「とんでもございませんよ」

加納がおどけた調子で言った。

「こんない女を三人もほつたらかしにして、どこに行っていたのよ？」

由香里がオチチョコとトツクリを持ち、加納ににじり寄って来た。

「はいはい」

「はいはい、じゃないでしょう。あんた幹事じゃない。何か見せてよ！」

香織が食い下がった。

「そうだ。加納ちゃんのストリップが見たいな」

由香里が加納の膝に手を当てながら言った。

「いいアイデア！京子も起こしてやらないと可愛そうよ」

香織も加納の隣に移動してきた。

「せっかく気持ちよさそうに寝ているんだから可愛そうだよ」

加納が京子の寝顔を見詰めながら言った。

「京子のことはいいよ。それより早く脱いで。全部

よ」

由香里が加納の肩に豊満な胸を押し付けて来た。

「わかったよ。今夜は特別サービスだ」

立ち上がって、Tシャツを一気に脱いだ。下着は付けていなかった。鍛え抜かれた筋肉が生きづいていた。しかし、ボディビルで鍛えた筋肉とは違いシヤープな感じだ。少しも無駄な贅肉は付いていなかった。それを見て女達が目を輝かせた。

「ズボンも脱ぎなさい！」

言われたとおりにズボンを脱ぎ、パンツだけになった。股間の盛り上がりには女達の視線が集中した。

ふたりとも生唾を飲み込んだ。由香里が加納の前ににじり寄って、股間に顔を近付けた。手を差し伸ばしパンツを引き降ろした。黒々としていきり立った巨根が女達の視線を貫いた。由香里がパクリといった感じで頬張った。

「由香里。ひとりだけズルイよ！」

香織も近付いてきて、加納の硬く引き締まった尻を舐め回した。

加納は女達によって、床に横たえられ、手や口を使いたい放題に廻りぬかれた。女達は交互に、騎上位になり加納を犯し続けた。明け方近くになり加納はやっと開放された。

「会社の皆には内緒よ」

香織が耳打ちするように言ってきた。女達は酔いが覚めたらしく、いつもの表情に戻っていた。京子はテーブルの横で、座布団を枕にして本格的に寝込んでいた。三人は部屋のバスルームで汗を流した。

「喉が渴いちゃった。何か無いの？」

シャワーの後で、由香里が加納に聞いてきた。

「ちょっと待ってて」

加納は部屋に備え付けの冷蔵庫から、ウーロン茶のペットボトルを2本持ち出して女達に勧めた。ウーロン茶を飲み始めて、少しすると香織が大きな欠伸をした。由香里も同じだった。

「何か、凄く眠くなってきたわ」

「もう夜明けが近いんだ。当たり前だよ。少しでも

寝た方がいい」

二人の女達は、ふらつくように和室に隣接するベツドルームに入り、倒れこむようにしてベッドに横たわった。すぐに安らかな寝息が聞こえてきた。

加納はズボンのポケットから小さな薬ビンを取り出した。中に入っていた透明な薬品をハンカチに染み込ませ、それを近くで寝ていた京子の鼻に押し当てた。京子の寝息がいつそう深いものになった。そのとき、部屋のドアが開けられ、男達がタンカを運び入れてきた。

「色男はいいよな。こんな美人を好きにできるんだから」

「そうでもないさ。そんなことより早く運び出せ。

そろそろ村長との約束の時間だ」

ホテル二階のパーティ会場には、テーブルが三卓並べられ、全裸に剥かれた京子達三人が横たわっていた。三人ともウーロン茶やハンカチに沁み込ませた睡眠薬により、深い眠りに落ちていた。

テーブルの近くには、加納と、頭部が禿げ上がり、でっぷりと太った中年男が向かい合うようにして椅子に座っていた。

「今回の供物は極上品だな。でかしたぞ、加納」

「村長のご支援があつたからです」

加納は、村長の海藤に深く頭を下げた。

部屋には彼らの他に、十数名の若い男達が、椅子に腰掛けていた。

「何か望みでもあるか？」

村長の海藤が満面に笑みを浮かべながら尋ねてきた。

「奉納の日まで、京子を独占させて下さい」

「ふーむ……」

海藤は少しの間、目を閉じていた。

「いいだろう。最高級の美女を三人も用意してくれ
たんだからな」

それを聞いて、加納は立ち上がり京子を抱き上げて部屋を出て行った。

「いいんですか？村長」

部屋の隅で見っていた男達のひとりが、海藤に声をかけた。

「何がだ？」

「加納に女を独占させて」

「まだ、二人もいるじゃないか。それに加納は奉納の日までといった。直前に腰が抜けるほど抱けばいい」

海藤立ち上がり、香織が寝ているテーブルに近付いた。他の男達もテーブルを取り囲んだ。海藤が乳房を鷲掴みにして、柔らかく揉み始めた。

「こいつは素晴らしいぞ。手の平に吸い付く感じだ」

海藤が大きな溜息を漏らした。

「太腿の肉も柔らかいです。こいつは最高の食材だ！」

二十代前半に見える男が、叫ぶようにいった。

「よし、今度はケツだ」

海藤が言うと、何本もの手が伸びて、香織をうつ伏せにした。

「素晴らしい！染みひとつないじゃないか。それにこの手触りは何だ。すべすべで、絹のように滑らかだ。肉付きもいい。十分な肉が取れるぞ」

さらに海藤は、両手で香織の尻を割り、顔を近づけた。

「肛門もきれいな色をしておる。排泄以外使っていないようだ」

海藤の一指し指が、香織のアヌスに差し込まれた。

「おお……。締め付けるぞ！よし、今度はオマ＊コ

だ」

海藤は、再び仰向けに横たえられた香織の長く形のいい両足を大きく持ち上げた。

「美味しそうなアワビじゃないか！」

海藤が唸るように言った。

「蒸したらいいんじゃないですか？」

「生でも美味そうだ」

海藤は香織のアヌスに人差し指を根元まで挿入し、さらに膣に口を付けて、ガツガツといった感じで舐った。近くで見ていた男が、香織の寝ても崩れない豊満な乳房を舐め回した。十分に膣が潤み切ったころ、海藤は黒々とした男根を膣に突き込んだ。

「最高に締りがいいぞ」

上擦った声を上げながら、腰を前後左右に振った。海藤が中に放った後、休む間もなく次の男が男根を挿入し、腰を振りたくった。

隣のテーブルでは、うつ伏せに横たわっていた由香里の盛り上がった白い尻に男が、顔を押し付けていた。その後、由香里も男に背後から貫かれた。

男達は入れ替わり立ち代わり、意識の無い二人を犯し続けた。意識が覚めかかると、タオルに染み込ませた麻酔薬を嗅がせた。

一方、加納は京子をホテル内にある自室に運び込んでいた。二十畳ほどのダイニングキッチンに十畳ほどのベッドルームが付いていた。

加納は京子をダブルベッドに横たえ、自らも全裸

になり、添い寝をするように横たわった。意識が無い京子の口に吸い付き、舌を吸い出して存分に吸った。

蜜の様な味がした。形の良い乳房に吸い付き音を立てて吸いまくった。

加納の口は徐々に下方へと移っていった。美味しそうな性器は後回しにして、染み一つ無い太腿を舐めた。脹脛も舐め、足の指も丹念に舐めた。

股間に顔を埋め、膣の匂いを嗅いだ。ボディソープに交じって、淫靡なメスの匂いを感じた。夢にまで見た女の匂いに脳が張り裂けそうだった。膣に口をつけて、激しい勢いで吸いまくった。クリトリスを舌先で舐った。いくら舐めても厭きると言うこと

は無かった。

裏返しにして、染み一つ無く、すべすべで盛り上がった白い尻の合間に顔を埋めた。いつまでもそうしていたかった。アヌスの匂いを嗅ぎ、気が済むまで舐めた。

男根が限界までに怒張していた。これ以上我慢することなどできなかつた。京子を仰向けにして、両足を持ち上げ股間を割った。加納の唾液で潤み切つた膣に男根をズブリといった感じで挿入した。京子の膣口は狭く、凄まじいまでの締め付けに、加納は思わず喘ぎ声を上げていた。

数時間後、ホテルの一室では、香織と由香里に京子の三人が、それぞれビニールマットを敷いた簡易

テーブルに横たえられていた。三人とも麻酔が効いているのか意識は無かった。彼女達の周りでは、水着姿の若い女達が立ち働いていた。

香織達の膣に吸引機へと繋がれたホースを入れ、男達が放った精液を吸いだしていた。その後で、全身くまなくボディソープとシャワーで洗い清めた。香織達三人が目覚めたのは、午後一時過ぎだった。

「随分寝ていたみたいね」

京子がベッドから起き上がり、軽く伸びをした。

「完全に熟睡していたわ」

続いて香織がベッドから降りた。

「私、すっごくエッチな夢見ていたみたい」

最後に由香里がベッドから降りて大きな伸びを

した。三人が洗面を終え、化粧をしているときに、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「どうぞ。開いていますよ」

京子がノックに答えると、ドアが開き、黒色のTシャツにジーンズを穿いた加納が立っていた。

「おはようじゃなく。こんにちはかな。皆、お腹空いたらろう？昼飯の用意ができているよ」

加納は女達を二階のレストランに案内した。彼女達は浴衣から私服に着替えていた。昼食はバイキングだった。加納も彼女達に付き合い席に付いた。皆、会話を楽しみながら、箸を動かした。加納は正面に座った京子に、いつしか熱い視線を送っていた。気が付いた京子がどうしたのという感じで、視線を合

わせてきた。

加納は食事があまり喉を通らなかった。少し前まで、意識の無い京子の裸身を弄んでいたのだ。

「さつきから、どうしたの？」

加納の隣に座っていた由香里が聞いてきた。

「何が？」

「何って。京子のことばかり見ているじゃない」

由香里がからかうように言った。

「京子ちゃんが、綺麗過ぎるからだよ」

京子の方を見ながら答えた。

「そんなこと言われたって、何も出ませんよ」

そう言いながらも京子の頬は、少し赤くなっていた。

「朝からお熱いわね。ところで、今日はどういいうス
ケジュールになっているの？」

香織が会話に割り込んできた。

「この辺一帯の散策はどう？ 滝とかきれいな川を
見るのは気が休まるよ」

「露天風呂もあるの？」

「もちろん。川が天然の温泉になっているんだ。そ
うそう、青年会のメンバーが案内してくれるよ」

「青年会？」

「二十代から三十代前半で、気のいい奴ばかりだ。
男前もいるよ」

「ハンサムボーイ大好き！」

由香里がおどけた調子で言った。

「決まりのようね」

「夜は、祭りの前夜祭があるんだ。打ち上げ花火も

あつて、最高にロマンチックだよ」

第三章 拉致

ホテルのロビーには、青年会のメンバー5人が香織と由香里を待っていた。皆、二十代くらいの年齢で、品のいい顔立ちにセンスのいい衣服を着ていた。育ちの良さを感じさせた。香織と由香里はすらりと伸びた太腿が見えるミニスカートを穿いて現れた。彼らは簡単な自己紹介を済ませた。年齢が近いせいか、会話も弾み、皆、すぐに親しげな関係になっていった。

加納は、京子連れ立って、一足先にホテルを出ていた。

残されたメンバー達は、ホテルから大型のワゴン車に乗り、村の周囲に広がる原生林に分け入った。

林道の終着点で車を降り、よく手入れされた遊歩道を歩いた。両側は切り立った溪谷となっており、遊歩道の下、数メートルには澄み切った清流が音を立って流れていた。

「きれいな所ですね」

香織が、エスコート役の寺島という若い男に声をかけた。

「そうですか？俺達毎日見ているので馴れちゃってます」

寺島が香織の顔を眩しそうに見詰めながら言った。

何時の間にか、由香里とエスコート役の男の姿が見えなくなっていた。香織は、由香里が男とうまく

やっているものと考え、あまり気にしなかった。

その頃、由香里は、若く美しい顔立ちをした男と、両側を深い森に囲まれた林道を歩いていた。木漏れ日が高い木々の梢の合間に見えていた。

「この奥に天然の露天風呂があるんですよ」

エスコート役の大原が、由香里に話し掛けた。

「本当！いいな。でもタオルとか持ってこなかったし」

二人は親しげに手を繋いでいた。大原は、由香里にとって好みのタイプだった。

「大丈夫ですよ。これに入っていますから」

大原が背負っていたナツプザックを指で指し示した。

会話の途中で、近くから水が流れる音が聞こえてきた。大原は由香里の手を引いて、脇道に入った。すぐに森が開け、川幅五メートルほどの清流に行き着いた。小石を敷き詰めた川原には、あちらこちらから湯気が上がっていた。周囲には誰の姿も見えなかった。

「着きましたよ。あれが露天風呂です」

大原が指で指し示す方向に、天然の岩で造られた三十畳ほどもある露天風呂が見えた。近くに形ばかりの木材で作られた脱衣場が立っていた。

「凄い！」

由香里が目を輝かせ、叫ぶように言った。

「先に入ってください」

「私ひとりじゃ恥ずかしいわ。お願い一緒に入っ

て」

由香里が甘えた声でいい、大原の手を引いて脱衣場に向かった。

三畳ほどの脱衣場に入ると、由香里は大原に抱き付き、口唇を重ね、舌を絡ませた。大原は口付けをしながら由香里の衣服を脱がせていった。

由香里を全裸にさせてから、大原は由香里の前に膝間付いて、臍に顔を付けた。

「そこは駄目よ。お風呂に入ってからにして。お願い……」

由香里は裸の尻をもぞもぞと動かした。

「由香里ちゃんの匂いを嗅ぎたいんだ。むぐ……」

大原は、かまわず臆に口をつけて舐めまわした。

懐かしい若草の匂いがした。すぐに臆から透明な愛液が滴り落ちてきた。クリトリスに口を付け、音を立てて吸った。

「大原！芝居はそのぐらいにしておけ」

ドアが乱暴に開けられ、頭部が禿げ上がった見知らぬ中年の男が入って来た。

「何なの？あなたは？」

由香里は両手で、胸を隠していた。

「村長さ」

背後の大原が当然といった感じで由香里に教

えた。先ほどまでの優しさは微塵も感じられなかった。

「愚図愚図してないで、此処を出るんだ」

村長の海藤が、呆然と佇む由香里を両手で抱え上げた。由香里は恐怖のあまり一言も発することができなかつた。白い尻が無残に震え慄いていた。

「何度見ても、柔らかくて美味そうな女だな」

海藤は独り言を言いながら、由香里を抱いて脱衣場を出た。大原が後に続いた。

露天風呂の周囲には、何時の間にか、何処から来たのか人垣ができていた。数十人の男女が、由香里の裸身を眺めていた。

海藤が乱暴に由香里を、湯船に放り込んだ。湯船

は深く、岩に打ち付けられることは無かった。

「助けて！」

由香里は湯から顔を出して、泣き叫んだ。周りで見っていた数十人の男女が一斉に衣服を脱ぎ捨て、湯船に入ってきた。由香里の裸身に何本もの手が、絡みついてきた。ひとりの若い女が前から抱き付いてきて、由香里の唇を奪った。臍にもアヌスにも指を入れられていた。

何時の間にか指が男根にかわっていた。由香里は見知らぬ大勢の男女に絡まれ、恐怖のあまり湯の中に失禁していた。

突然、身体が宙に浮いた。何人もの手が由香里の裸身を支えていた。湯船から出され、大岩の上に横

たえられた。そこで本格的な陵辱が開始された。股間を勃起させた若い男に両足を大きく広げられ、股間を舐め回された。

欲情に顔を引き攣らせた若い女が、アヌスに指を入れてきた。両乳房は淫らな笑みを浮かべた中年の男女に舐め回されていた。余りの快感に恐怖感は薄れ、意識が朦朧としていた。

うつ伏せにさせられ、盛り上がった白い尻を舐め回された。腰を持ち上げられ背後から、凶太い男根が突き入れられた。村長の海藤が、太鼓腹を揺すらせながら、由香里を犯していた。

その後、由香里は、全裸のまま海藤の家へと連れて行かれた。海藤の家は四大家族で、四十代半ばに

なる妻の郁子と、大学生の弘美と高校生の拓也が由香里を出迎えた。

最初に拓也の部屋に連れ込まれた。拓也は姉の弘美とは、容姿が似ていなかった。美人の姉に比べ、不細工な顔立ちをしており、身長も低かった。

由香里は、自分よりも十センチも背が低い拓也に組し抱かれ、乳房を舐め回された。いくら小柄といえども男の力には敵わなかった。

薄笑いを浮かべる拓也に、ベッドに押し倒された。唇を奪われ舌を吸い出された。拓也の図太い指が膣に侵入してきた。乱暴に中をかき回された。優しさは微塵も感じられなかった。自然に涙が溢れ出てきた。醜い小男によって、好き放題に陵辱される屈辱

に身を焦がしていた。

「ねえちゃん。いいものやるよ」

拓也の顔が離れ、首を手で掴まれ前に引かれた。目の前に猛々しく黒々とした巨根が現れた。由香里は一瞬、その大きさに息を飲んだ。彼氏のより遙かに大きかった。拓也は矮軀の中に巨大な男根を隠し持っていたのだ。

異臭がする男根を顔に擦り付けられた。強引に口を割って侵入してきた。とても呑み込める大きさではなかった。顎が外れそうな痛みに耐えていた。

拓也によって頭部をベッドの上に固定されながら、口腔を犯された。苦しきのあまり失禁してしまった。

「駄目じゃないか。自分で後始末しろよ」

拓也の腰の動きが早くなった。生臭い匂いがする
大量の精液が口内に放出された。

「全部飲みよ」

拓也は冷たく言い放った。逆らう気力は失せてい
た。言われるままに苦味のある精液を喉の奥に流し
込んだ。

不意に胸を蹴られ、ベッドに仰向けにされた。拓
也が両足を大きく割って、股間に顔を付けてきた。
ざらついた舌で膣やクリトリスを狂ったような勢
いで舐められた。

すぐに、うつ伏せに横たえられ、腰を両手で捕ま
えれた。膣に巨根を押し付けられた。少し前、射精

したというのにそれは、怒り猛っていた。

「もうやめて……」

由香里は呟くように言った。

「まだ、わからないのか！お前は俺の奴隷なんだ

よ」

強引に膣に捻じ込んできた。あまりの巨大さに由香里は息を詰まらせ、背筋を仰け反らせた。クリトリスや乳房を指で刺激されながら、膣内を巨根でかき回された。

「ああああ……」

由香里は何が何だかわからなくなっていた。疼くような快感が身体の芯から湧きあがってきた。仰向けにされ、抱き抱えられるようにして、膣に再び挿

入され、激しい勢いで下から突き上げられた。唇に吸い付かれ、口蓋を開けられ舌を吸い出された。激しい勢いでしゃぶられた。

これが高校生のテクニクだろうか。由香里は訳がわからなくなっていた。

アヌスにも指を入れられ直腸をかき回された。限界が近付いていた。拓也の背中に爪を立て、仰け反るようにして果てた。

激しい陵辱の後で、由香里の裸身は様々な道具を使つて悪戯された。学習机の上に、仰向けに横たえられ、膣とアヌスに数本の鉛筆やボールペンを差し込まれた。削られた芯の部分を入れられなかったのが、せめてもの救いであった。拓也は無言で由香里

の裸身を弄んでいた。

その頃、ホテルでは、客室で加納と香織達がテーブルに付いて向き合っていた。

「加納さん。由香里が行方不明というのは本当なの？」

香織が加納を睨み付けた。

「そうなんだよ。森ではぐれたらしい」

加納の声はいつになく沈んでいた。

「はぐれたってどういうことなの！」

香織が声を荒げた。

「大丈夫だよ。駐在所の警官と青年団のメンバーが

森に入って由香里ちゃんを捜索しているから」

「その青年団と由香里は一緒にいたのよ」

香織はなおも食い下がった。

「香織さん。加納さんをあまり責めないで。由香里

さんの身に何が起こったかまだわからないんだか

ら」

京子は香織を宥めすかすように言った。

「あんたは黙っていなさい！後輩の分際で生意気

よ」

それを聞いて、京子の大きな瞳が潤みだした。目

尻に一筋の涙が浮かんできた。

「御免なさい。貴女を責めるつもりは無いのよ」

香織は少し落ち着いたのか、嗚咽を上げる京子の

肩を抱いた。その時、部屋に青年団のメンバーのひとりが入って来た。加納に何かを耳打ちしてすぐに出て行った。

「どうしたの？」

「由香里ちゃんが見つかったよ。沢で倒れていたんだ。かなりの重傷を負っているそうだし」

「重傷ですって！」

「心配はいらないよ。病院で手当てを受けているから」

「早く、町の病院に移すべきじゃないの？」

「設備の点なら、大学病院にも負けないよ。それに今動かすのは危険だということだし」

「お願いだから、早くその病院に連れて行って！」

三人は、ホテルを出て由香里が、治療を受けているという村外れの病院に向かった。

その病院は新築の鉄筋コンクリート3階立てで、人口数百人足らずの村には似つかわしくないほどに建築費が、かかっているようだった。それにも関わらず、ロビーにはほとんど人影が見当たらなかった。

由香里はICUで治療を受けているということ、で、三人はそこに向かった。由香里の容態は、絶対安静ということ、ICUの中に入ることはできなかった。担当医の医務室に案内され、説明を受けることになった。担当医の説明では、由香里は崖から転落し全身打撲を負ったとのことであった。意識が

戻らず、昏睡を続けているが、命には別状がないと
のことだ。それを聞いた香織や京子は安堵の溜息を
漏らしていた。また、医務室に設置されたモニター
には、ICUの様子が映し出されていた。全身を包
帯にまかれ、ベッドに横たわる由香里の痛々しい姿
が映し出されていた。

「顔にも怪我をしたんですか？」

京子が担当医に確認したように、由香里は顔全体
を包帯で巻かれていた。

「大丈夫ですよ。顔の傷は浅いので痕は残らないで
しょう」

三十代半ばに見える担当医の医師が、落ち着いた
口調で答えた。近くに控えていた二十代前半の看護

婦が、香織や京子に気付かれぬようにふたりの全身を舐めるように見詰めていた。その頃、加納はICUに入り、絶対安静の筈である由香里に話し掛けていた。

「中々の演技だな。陽子。おっと動かない方がいい。カメラでお前の様子を女達が見ている筈だ」

加納はカメラの視界からは入らない位置にいた。

「兄さんの悪知恵には感心するわよ」

女は加納の妹の陽子であった。口をなるべく動かさないようにして答えていた。

「お前には、極上の部位を食わせてやるよ。だから、大人しく寝ているんだな」

加納はそう言い残し、ICUを後にした。

村長宅に監禁されていた由香里は、拓也から解放され、今度は女子大生になる姉の綾香によって、一階にあるバスルームへと連れ込まれていた。

綾香は、弟の拓也とはまったく似ておらず、美しい顔立ちに、百七十センチくらいの身長でモデルのような容姿をしていた。

「拓也のチンポ大きかったでしょう？」

由香里の耳元で囁くように言ってきた。白魚のように白く繊細な指が、由香里の乳房や尻を撫でさすっていた。

「……」

綾香は欲情に濡れた顔付で、由香里の膺とアヌスに指を入れ、中を掻き回してきた。拓也による騷り

のために身体は過敏になっていた。クチユクチュと
いう厭らしい音がバスルームに響いていた。

「あんた、きれいな。身体もこんなにエッチだし」

「ああああ……。そこは駄目……」

「お尻の穴感じるの？本当にエッチなんだから。お
仕置きしてあげるわね」

バスルームに横たえられ、臍に指を二本束ねた状
態で入れられ、激しくピストンしてきた。

綾香の巧みな指の動きのため、すぐに頭の中が真
っ白になった。いつの間にか、大きな喘ぎ声を上げ
ていた。そのまま、何度も逝かされた。

朦朧とした状態で、二階にある綾香の部屋に連れ
込まれ、ベッドに横たえられた。

抱きつかれ、唇を奪われた。舌をしゃぶられ、唾液を吸われた。同性の柔らかな舌技に我を忘れた。舌を吸われ、膺を指先で弄られるだけで逝くことができた。

股を大きく割られ、膺やクリトリスを舐られたときは、思わず大きな喘ぎ声をあげ、すぐに失神した。失神しても解放されることは無かった。ペニスバンドを装着した綾香に両足を大きく広げられ、犯された。続けた。

綾香に犯された後、夕食時には、皿の代わりとして女体盛りにされた。六人掛けの食卓テーブルに横たえられ、身体中に刺身や野菜を盛り付けられた。皆に、刺身や野菜を膺に擦り付けられた。彼らは、

由香里の体液が付いた食べ物を嬉々として頬張った。

「貴方、ワカメ酒はいかがかしら」

妻の美香が、由香里の膣にトックリの口を差込み酒を注ぎ込んだ。村長の海藤が、由香里の膣に口を付けて美味そうに啜り上げた。膣の粘膜からアルコールが一気に、全身にめぐった。由香里は呆然とした表情で天井に視線を漂わせていた。

拓也と綾香は、由香里の寝ていても崩れない豊かな乳房に、生クリームを塗り直に舐めていた。

夕食の後で、美香にシャワーで全身を洗われ、寝室に連れ込まれた。寝室では海藤が、でっぷりと脂肪が付いた醜い裸身をベッドに横たえ待っていた。

「待ちくたびれたぞ」

「貴方、待ったかいがあったわよ。見てこの身体」

美香が、背後から由香里の乳房を驚掴みにして、捻り上げた。開いている方の手で剥き出しにされた臍を覗いていた。

「お前が先に犯せ。何度も逝かせてやるんだ」

美香も全裸になり、脂肪が付きぶよぶよとした白い裸身を晒した。由香里をベッドに、うつ伏せに横たえた。

美香の目が、由香里のすべすべで盛り上がった白い尻に吸い寄せられた。そこに、自分が失った若さと美を見ていた。美香は我を忘れて、同性の白い尻に武者ぶりついた。太腿に抱き付き、尻の割れ目に

顔を入れて、アヌスを存分に舐め回した。いくら舐めても欲情が尽きることは無かった。

「貴方。この美味しそうなお尻を食べさせてね」

「わかっている。お前には極上の部位を食わせてやるよ」

「聞いたかい？お前の此処は私が食べてあげるからね」

「……」

美香は、極太のペニスバンドを装着し、由香里を四つん這いにさせ、背後から貫いた。由香里の重たげな乳房を揉みながら、ゆっくりと腰を前後させ始めた。クチュクチュという厭らしい音が部屋中に響いていた。由香里はシーツを驚掴みにして、額に皺

を寄せ喘ぎ声を上げていた。

度重なる陵辱のために、嫌悪感は次第に薄れていった。投げやりな気分支配されていた。もうどうでも良かった。突き上げるような快感に身を任せていた。膣をペニスバンドで犯されながらクリトリスに指先で刺激を加えられ、仰け反るようにして果てた。

それでも解放されることは無かった。美香に代わって、海藤がベッドで喘いでいる由香里の両足を持ち上げ、膣を剥き出しにさせて、喰らい付いてきた。狂ったように舐め始めた。舐めるといふよりは嘔む感じだった。由香里は苦痛のあまり、髪を振り乱し泣き叫んだ。

「いい声で泣くわね」

隣で見ていた美香が、由香里の盛り上がった白い乳房を揉みながら、嬉しそうに笑った。

暫く、股間への狂ったような愛撫が続いた。それが終わると本格的な陵辱へと移っていった。海藤がベッドに横たわり、由香里を腰の上に載せた。膣に根元まで黒々とした男根が突き刺さっていた。

由香里の背後からは、美香が抱きつくようにして、アヌスを指で犯し、乳房を揉みしだいていた。海藤が下から激しく腰を突き上げてきた。由香里は泣きはらした顔を歪ませ、喘ぎ声をあげ続けた。

第四章 前夜祭

第五章 陵辱の嵐

第六章 生贄